

- 対象地域
広島県山県郡北広島町
(西中国山地国定公園)
- 設立日:H16.11.7
- 構成員数:32人
- 全体構想作成日:H18.3.31
- 実施計画作成日:H18.10.30
(H28.5現在)

やわたしつげんしぜんさいせいきょうぎかい

八幡湿原自然再生協議会

再生 目標

「命の環 つなげる」をキャッチフレーズに、牧草地造成前の昭和30年代前半頃の湿原生態系を再生する。

本地域は、広島県の北西部に位置し、1,000m級の山に囲まれた標高800mの盆地です。また、ヌマガヤーマザミ群集に代表される中間湿原が点在し、自生のものとしては貴重なカキツバタが生育しています。

しかし、牧場化に伴う排水施設や道路の整備が原因と思われる湿原の乾燥化により、周辺部からアカマツやイヌツゲ等の木本類が侵入し、希少種の生育環境が悪化しています。このため、自然生態系の保全・再生のための計画を作成、湿原環境の再生に向けた取り組みを進めています。



【事務局】

730-8511
広島市中区基町10-52
広島県自然環境課
野生生物グループ内
電話:082-513-2933

活動報告

自然再生協議会全国会議(伊豆沼・内沼自然再生協議会)

【報告者】広島県自然環境課 村田 博史

環境省主催で開催している「自然再生協議会全国大会」が、今年度は、伊豆沼・内沼自然再生協議会が受入機関となり、平成29年11月1日・2日の日程で宮城県栗原で開催されました。当協議会からは、白川委員と事務局の村田が参加しました。

1日目は、(公財)宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団による特別講演の後、サンクチュアリセンター周辺で現地視察が行われ、ハス刈りボート・水生植物の復元技術・外来魚駆除などの取組みを視察し、日没時には、マガンのねぐら入りを見学しました。



伊豆沼・内沼自然再生協議会(平成20年9月7日 設立)【自然再生の目標】

昭和55年の大雨が発生する以前の頃の伊豆沼・内沼を目指す。

- 水環境が改善され、沈水植物(マツモ・クロモ等)や浮葉植物(ヘルムシロ・ジュンサイ・ヒツジグサ)など豊かな水生植物群落が広がり、それらを生息環境とするエビ類などが回復した伊豆沼・内沼
- 多種の水鳥・渡り鳥(ガン・カモ類)をはじめとし、在来魚貝類(ゼニタナゴ)、昆虫類など、多様な生物が生息する伊豆沼・内沼
- 周辺の農村環境や地域の人々の生活と共存し、湿地環境、湿原環境が次世代に継承されていく伊豆沼・内沼

★ 伊豆沼・内沼の概要

宮城県北部、登米市・栗原市に位置し、面積は491ha。飛来する鳥類は、ハクチョウとガンが代表的であり、マガンは日本に飛来する90%が飛来している。確認された鳥類は235種におよび、日本での確認数の4割を超える。水深は1.6mと遠浅で浅瀬を好む植物が生育している。また、魚類や昆虫類も多く生息している。



★無線誘導ハス刈船

PCにプログラムを組み込み、GPSと連動することにより、完全自動で作業を行う。刈払により水質(溶存酸素)は一部改善された。沈水植物等の育成・増殖等事業(埋土種子からの植生復元)と連携して、沈水植物の個体群の回復を図るとともに、モニタリングにより効果を検証する。

★電動ショッカー船

発電器で電気を起し、船から突き出たアームから水中に電気を流す。最大で1000vの電流を流して魚を一瞬気絶させ、バスやギルだけをすく。人工産卵床を使った防除活動と合わせることで効果を最大化させる。この結果、近年では19年ぶりにゼニタナゴが確認されている。

2日目は全体会議の後、分科会に分かれ「自然再生の成果とその活用」をテーマに、次の議題について、意見交換が行われました。「自然再生事業の成果とは何か」「どのように成果を見える化しているか」「成果を活用した普及啓発(誰にどのように見せていくか、地域住民、企業等)の手法と成果」

各分科会では活発な意見交換が行われ、とりまとめの後、全体総括での議論が行われました。(* 内容については、後日、整理の上、環境省から成果品が発表される予定です。)

環境省では、自然再生事業に関する理解の増進や取組の拡大を図りたいと考えており、法制定からこれまでの自然再生という施策を振り返り、今後の推進に向けた施策の見直しや自然再生が自然環境・社会環境に与えた影響を示すことで、取組みの拡大を図りたいと考えています。

また、環境省事業「自然再生協議会を対象とした社会学的評価の手法開発」のワークショップが当協議会を対象に開催される予定です、事務局等が参加する予定です。